

ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier

1988年頃、筆者は筑波万博(1985年)が行われた跡地に、1995年のスペイン・セビリア万博の組織委員の1人を案内したことがある。その委員は「万博そのものよりも、その跡地や使われた建設資材がその後どう使われているかに興味がある。日本はどうしているか知りたかった。」と言っていた。今から40年近く前のことである。その後、筆者が1999年にスペイン・マドリッドを訪れた際、サルスエラ競馬場の中に野積みになったシステムトラス部材の山を見つけた。競馬場の管理者に尋ねると、1995年のセビリア万博のパビリオンで使われたシステムトラスを次の利用者が見つかるまで保管しているとのことであった。

システムトラスは1960~70年代に発展した、規格化されたジョイントとパイプ材をボルト接合する工業化構造で、理想的には組み換えや再利用が可能なシステムとして認識されていた。しかし、実際に組み換えや再利用を行うことが経済原理にかなっている場合は少ない。これを敢えて行うには、強い情熱と企画力、好機、そして理解者などに恵まれないと実現しない。

ウーマンズパビリオンは、2020年のドバイ万博日本館のファサードに用いられたシステムトラスを含む部材、パイプ約4300個、ジョイント1500個、膜材約1200点を再利用しているという。実際のシステムトラスはオーダーメイド化(非規格化)されていて実質的な組み換えは非常に難しいものである。最適な組み換えの組み合わせを導くには近年のデジタルファブリケーションの技術が不可欠である。これを条件の異なる実建築に適用し、万国博覧会というワールドイベントのパビリオンとして世界に発信するということは、長年、できそうで誰もできなかった現代の万国博覧会のパビリオンのあるべき姿を示したという点で、特筆すべきことであると考えられる。2027年の横浜園芸博のパビリオンとしての再利用も計画中ということで、今回の特別賞の表彰に正に十分合致するものである。

表彰委員 川口健一